

カンボジア王国「アンコール・ワット西参道修復機材整備計画」調査報告

2013年10月29日

2013年8月11日～19日まで、JICA一般文化無償資金協力案件「カンボジア王国アンコール・ワット西参道修復機材整備計画」の機材計画調査に同行してきました。世界三大遺跡の一つアンコール・ワットの西参道は石組の橋で、アンコール・ワットを訪れる人は必ず通るメインゲートとなっています。しかし12世紀に建立されて、その後長い年月を経るに従い石が崩れたり、溝が広がったりと非常に歩きづらく、安全面からも修復が必要とされてきました。

1960年代のフランスの支援や上智大学の支援で西参道の修復は大方終わっていますが、まだ1/4が修復されずに残されたままです。本案件では、伝統的な石積の工法を用いつつ、より効率的で安全な修復を行うための機材を整備することを目的としています。

調査では、整備機材を決めるために施主であるアプサラ機構と協議を行いました。また、実際に西参道に赴き石の大きさを測ったり、他の遺跡の修復現場で使用されている機材を見学して維持管理の方法等も調査しました。

私は今回、機材計画調査に初めて参加しましたが、実際に機材を使用する人と協議をすることで、何を考え今回要請をしたかを知ることができました。また、施主の意見と日本政府の方針を両方聞き、最終計画をまとめるというコンサルタントの重要性も感じました。

一方で、日本の無償資金協力のシステムの複雑さは海外では理解されづらいということも実感しました。機材の整備先であるアプサラ機構は日本政府の支援を受けるのが初めてであったため、システムの説明に多くの時間を費やしました。

調査を通し、施主は大の遺跡好きであり、アンコール・ワットのことを大切に考えていることを感じることができました。実際は、考古学に通じていることと修復のスキルがあることや、修復機材に関する詳しい知識があるということは別なので、コンサルタントはここをサポートする必要があります。しかし修復機材といっても手動で石を割るための小さな工具から、何トンもの石を運ぶための重機まで幅広くあるので、広く深い知識が必要になります。機材のメーカーと何度も相談しながら、細かな仕様を決めていきます。この作業は日本に帰国してからも続いています。こんなにも沢山のオプションやこだわりがあったのかと、感心してしまうことばかりです。

本案件が実施となった場合、修復機材は2014年末頃に納入され、2015年からアプサラ機構と上智大学の協力により修復が始まり、約6～7年をかけ修復をしていく予定です。

アンコール・ワットのメインゲートで日本の機材が活躍しているところを見るのが今から楽しみです。

(文責：大原)



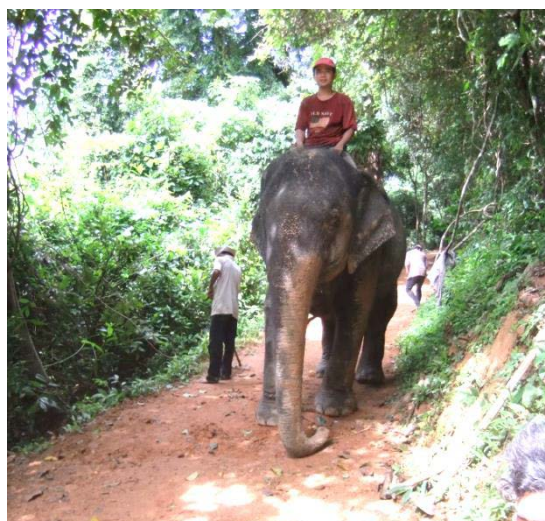
今回修復対象となる西参道の様子。



修復対象となる西参道のテラスの様子。現在は崩壊の恐れがあるため、立ち入り禁止になりビニールシートが被せられている。



アンコール・ワットでは年々観光客が増加、年間 100 万人もの外国人観光客が訪れる。



(おまけ) 近隣遺跡で見かけたゾウによる歩道の修復の様子。土を押し固める役目を担っている。